タイトル：「喜績（きせき）」

著者名：和織

文字数：4,922

あらすじ

十亜は恋愛感情が無い母親とゲイの父親のカムフラージュ婚の末に生まれた。十亜が三歳の頃に母と父は離婚したが、それからは父の恋人の佑月を含め、四人家族として暮らしている。とある日の佑月と二人きりの夕食で、そのきっかけが、十三年前に父が佑月をフッたことであったと明らかになった。

　キッチンカウンターに寄りかかりながら、十亜は個展のフライヤーを手に、料理中の佑月を覗くように見る。
「友達、連れて行く予定なんだけど、今度の個展」
　その言葉に、佑月は包丁を持った手を止め、十亜を見た。
「へぇ・・・初めてだね」
「うん、それで友達、紹介してもいい？つか向こうが会いたがってて、ゆづくんに」
「僕はいいけど、いいの？嫌なのかと思ってた」
「え、嫌じゃないよ。そんなこと言った？」
「ただ、そうなのかなって」
　佑月は苦笑いをしながら料理を再会する。
「嫌じゃなくて、まぁ、ちょっとハズいなとは思う」
「ハズい？」
「だって父親の彼氏を紹介するって・・・父親の彼氏でも、俺には三人目の親だし。その、家族の個展に、友達連れてくっていうのが・・・」
　十亜のモジモジした態度に、佑月は不思議そうな表情をした。
「それがハズいの？」
「うーん、なんか、ね。あれがなきゃ、こうなってはないんだけど」
「あれ？」
「前の個展のときにさ、切絵彫刻のガチャガチャ出してたじゃん？」
「ああ、キーホルダーね」
「同級生で、あれ鞄につけてた子がいてさ」
「へぇ・・・」
「クラスも違うし話したことなかったんだけど、キーホルダー見た瞬間に、「あっ」って声出ちゃってさ。で、訊いてみたら、その子ゆづくんのガチファンだった」
「めずらしいね高校生で。嬉しいけど・・・で、女の子？」
　佑月は十亜をチラリと見て、ニヤリと笑った。
「なんなのその顔。あのキーホルダー付けてなかったら今も話したことないままだって。ただの成り行きだから」
「僕に、この先感謝することになるかもしれないじゃない」
「・・・まぁ、その子のことは置いといて、やっぱ俺は、女子と恋愛すんだろうけどね」
「僕も、十亜はストレートだと思う」言いながら、佑月はパスタを皿に盛る。「できた。運んで」
　十亜はパスタとサラダとスープをテーブルへ運び、佑月はマグカップにお茶を入れて持って行く。二人は向かい合って座り、「いただきます」と言って食事を始めた。パスタを一口食べて「うまい」という顔をしてから、十亜は話を続ける。
「この先どうなるかはわからない、という覚悟を持って生きてはいるよ。多様性に、富ん

だ？家に生まれた訳だし」
「まぁ、可能性は広い分だけ楽しいよ。僕みたいに」
「可能性広かった筈なのに、なんであんなおじさんに落ち着いちゃったの？」
「言い方ね」
「父さん、マジでラッキーだよね。ただのファンだったくせに、たまたま、ゆづくんから声かけてもらえて、彼氏に昇格しちゃって」
「昇格・・・」苦笑いの後、佑月はそのときをなんとなく思い返した。「でもラッキーだったのは、僕の方だったんだと思う。本当に「たまたま」だったけど、あれがなかったら、向こうから声かけてくるなんてこと、なかったと思うし」
「でもやっぱ、ゆづくんの隣は美人の方が、見た目しっくりくるよ」
「僕は、外見によって誤った判断をしない人間になれたってことだね」
「俺、その試練クリアできる気がしない」そう言って十亜は肩を竦める。「・・・そういえばさ、なんで、男女で恋愛をする人たちを「ストレート」って言うんだろう。なんか、その他が曲がってるみたいじゃん」
「それが、人として真っ当な営みでなければならない時代が、長かったからじゃない？」
「まぁでも、うちの母さんの性格はひん曲がってる感じするけど」
「真子さんが？僕は、真子さんほど真っ直ぐな人っていないと思うけどな。本当、名前そのまんま」
「尋常じゃなく頑固なだけでしょ」
「でも、貫くって、すごく体力の要ることだよ」そう言って佑月は、自分の分のついでに、十亜の皿にもサラダを追加で取り分ける。「由人さんと結婚したのは、ご両親の為を貫こうとしたからで、離婚して僕をこの家に呼んだときは、僕を含め、自分の家族の為を貫いた訳でしょ。だから今、こうしていられるんだよ。十亜は僕がいない方がよかった？」
「そんな訳ないじゃん」
「君のお母さんじゃなきゃ、こうはならなかったよ」
　十亜の母である真子は、恋愛感情というものを持たずに生まれた人間だった。愛情というものがわからない訳ではない。むしろ情には真摯に向き合うタイプだし、いつかは自分の子供を持ちたいという気持ちだって、昔からあった。ただ、恋愛というものだけは、彼女にとって面倒で苦痛で人生に必要のない事柄だった。どんなに魅力的だとされる人物へも、そういう気持ちが湧かないし、それが自分へ向けられることも、気分のいいものではなかった。どうして自分のような人間が生まれたのか、どうしたら普通になれるのか、思春期の彼女の頭の中は、そういう考えでぐちゃぐちゃしていた。
　真子とは対照的に、ごくごく普通の夫婦であった彼女の両親は、とても仲がよかった。彼らが自分たちの娘がどんな人間かを知ったら、きっと傷つくだろう。そう思って、真子は自分の本質を隠して生きていた。そんな彼女が、就職先で運命の出会いを果たした。それが、十亜の父である由人だった。由人はゲイだったが、真子と同じように、その事実を

ひた隠しに生きていた。先輩と後輩だった二人はいつしか親友となり、お互いに、自身のことを打ち明けることのできた、本当の自分として尊重し合える、唯一の存在となった。だから二人は、家族になることにした。由人も子供が欲しいという気持ちはあったので、そこは努力をした。そうすることで、本来の自分を隠したままでも、「普通の夫婦」というカムフラージュの下で、お互い幸せに生きていける筈だったからだ。

妻で母親になった真子は、恋愛というものから真に解放された。夫で父親になった由人は、家庭を持ちながらも、一年ほど前から真剣に付き合っている若い切絵彫刻家の恋人と、安心して関係を続けられることになった（佑月は由人が結婚し子供を持つことを全く気にしなかった）。三人家族は、そうして平穏に暮らしていた。十亜が三歳になるまでは。

「でもなんで母さん急に、「やっぱり離婚して全部ぶちまける」ってなったの？」

十亜そうが言うと、佑月は目を丸くした。

「やっぱり本人から聞いてないんだ？」

「なんか、「段々嘘ついてるのがしんどくなっちゃってさー」って、いつもそんな感じにごまかされるんだよね」

「まぁ、あの人自分からは、言わないか」

佑月は視線を斜め上へ動かす。

「そんな、言えないようなことなの？俺は知る権利あると思うんだけど」

「別に悪いことじゃないんだよ。ただ、僕から言っていいのかな、って感じ」

「そこまで言ったら、言うでしょ」

言いながら、十亜は楽しそうにパスタをフォークに巻きつける。

「そう、ね。まぁ、そもそものきっかけは、由人さんが僕をフッたことなんだよね」

「は？」十亜はフォークを口に運ぶ手を止めた。「父さん？つか逆じゃなくて？」

佑月が首を振ると、十亜はわざとらしく驚愕の表情をして見せる。

「十歳も年下のこのイケメンを、あのおじさんがフッたの？」

「しかも君のせいで」

「え、俺？」

「子供には敵わないってこと」

「どういうこと？」

「あのね・・・」

佑月はもったいぶる様に、お茶をゆっくりと一口飲んだ。そしてカップを置くと、十亜を真っ直ぐに見た。

「今みたいに安心して自由に生きていられるのは、確かに幸せだよ。でも俺が幸せでいることは、自分の子供を騙して生きていくってことだ。「普通の父親」っていう嘘を本当にはできなくても、せめて嘘の通りに生きていないと、この先あの子と向き合っていけない。だからもう、誰とも恋愛はしない」

佑月の言葉に、十亜は首を傾げた。

「そう言って君のお父さんは、十三年前に僕をフッたんだ。要するに、子供ができてみたら、家の外で男と恋愛していることに、罪悪感を抱くようになっちゃったみたい」
「えー・・・だる。俺の為とか重いし」
「いやそれは可哀そうでしょ」
　佑月は呆れたように笑った。
「でも、それでなんで、こういうことになったの？」
「由人さんになにかあったときの為にって、僕と真子さん、連絡先を交換してたんだよ。で、別れてしばらく経ったある日、真子さんから連絡が来たの。「由人はあなたにフラれたって言ってるけど本当なの？」って。一瞬迷ったんだけど、この人に隠し事するの無理だろうなって思って、本当のことを言った訳。そしたら、家に呼ばれた。それで初めて十亜に会った」
「ほう・・・」
「かわいかったな、すぐ懐いてくれて。真子さん、僕を呼んだこと由人さんに言ってなかったから、家に帰ってきた由人さんさ、十亜と遊んでる僕を見て、漫画みたいに鞄落としてた」
「ああ、想像つく」
「そのときにはもう、全部カミングアウトするって、真子さんは決心してたんだよ。離婚届も、自分の欄はもう記入済みだったし。で、「由人とは離婚するけど、家族としてはやっていきたい。だけどまた勝手に恋人と別れられたりしないか心配なので、できれば一緒に住んでもらえない？」って言われたの。「出て行きたくなったときは出て行ってもらって構わないから」って」
「で、ゆづくんなんて言ったの？」
「爆笑しながら「いいよ」って言った」
「要するに・・・俺以外みんな変なんだよね、この家」
「確かに、誰が一番まともかって言ったらそうかもね。僕も、普通の家庭って知らないし、そういうのは居心地が悪そうって印象だったよ。でもこんなロックな家族なら面白そうって思った。ただ、二人が離婚する必要はないんじゃないかって、言ったんだよね。けど真子さんが、いつか僕と由人さんが籍入れられるようになったときの為に、自分とは離婚しておかないと、って。僕はそんなこと、考えたこともなかったけど」
「へぇ・・・」
　十亜はしばらく黙って、小さい頃のことを思い返した。彼が自分の祖父や祖母のことを記憶しているのは、小学生になった頃からだったが、それはもちろん、両親の離婚が原因だ。
　四十にもなった自分の子供たちからの突然の告白に、真子と由人の両親は当然ながら困惑した。しかもそれに加えて、「実は由人の同性の恋人を含め、四人で一緒に住むことにしました」と、衝撃の事後報告を受け、彼らは突発的に真子と由人との縁を切り、十亜がラ

ンドセルを背負う頃まで、会い来ることはなかった。そんな四人家族なので、理解してもらえないことも、理解できないことも、十亜は歳の割に、多く経験してきた。
「でもやっぱ、これでよかったな。俺の体、ほぼゆづくんの料理でできてるし」
　十亜は言った。
「それはよかった」
　そう言って笑うと、佑月は軽く十亜の頭に触れた。
「それにしても、この生活が父さんの過ちの上に成り立っていたとは」
「子供への愛、故のね」
「はいはい。あれ、ゆづくん今日ビール飲まないの？」
「あ、飲む」
「では俺が」
　十亜は立ち上がってキッチンへ行き、缶ビールとグラスを持って戻ってきた。そして佑月の前にグラスを置くと、缶を開けてグラスへ注ぐ。部屋の中に、琥珀色の液体が奏でる音が、静かに響いた。
「父さんて、この音好きだよね。飲めないくせに」
「喜びが積もる音みたいだって言ってた」
「うわ、彼氏の前だとそういうこと言うんだ」
「内緒ね」
　そう言って、佑月はビールを口へ運ぶ。
「どこから？」
　眉間に皺を寄せて十亜がそう言って、佑月が笑いながら首を傾げた。その彼から言葉が出るよりも先に、玄関のドアが開く音がして、由人と真子が二人揃ってリビングへ入って来た。
「おかえり。一緒だったの？」
　十亜が言うと、真子が呆れたような表情で由人を見る。
「私の方が二十分くらい遅いから先帰っててって言ったのに、駅で待ってたの」
「だって、最近ひったくり出てるでしょこの辺」
　コートを脱ぎながら由人が言った。
「僕も、夜はなるべく一人で歩かない方がいいと思うよ」
　佑月がそう言うと、真子は渋々頷いた。
「二人とも着替えてきな。パスタ茹でとくから」
「パスタ、やった」
　言いながら真子が二階へ上がって行き、その彼女に「明日は？遅いの？」と声をかけながら由人がついて行く。十亜はそんな生物学的両親と、飲みかけのグラスを手にキッチンへ向かうもう一人の親を、ぼんやりと眺めた。そうしていると、自分の中に、なにか今までにはなかったものが、雪のように降りてくるような気がした。